

奇想の画家たち — 若冲・蕭白を中心に —

辻 惟 雄

辻惟雄氏 略歴

東京大学名誉教授・MIHO MUSEUM館長

『奇想の系譜』（一九七〇、美術出版社）によって曾我蕭白、伊藤若冲らの絵画の再評価と流行の先鞭をつけ、近世の日本を解釈する新しい概念を与えた。その後も白隠など新しい画家を加え、また日本の美術を理解するのに「かざり」という見方を提案するなど、盛んな活動をしている美術史学者。

詳しいご紹介をいただきまして恐縮です。奇想の画家総まくりというのが今日のテーマですが、多分全部は無理で、端折らせていただくことになるかもしれません。そのときはご容赦願います。

お配りしましたプリントの、一枚目に横棒グラフがございますね。このなかの太い棒で引かれたものが、ご紹介のあった一九七〇年の拙著『奇想の系譜』で取りあげた画家であります。岩佐又兵衛、狩野山雪、伊藤若冲、曾我蕭白、長沢蘆雪、歌川国芳の六人。江戸時代の初期から末に

かけての画家です。かれらのスタイルはさまざまですが、表現の傾向が似通っていて、一つの線上に位置づけることができる、そういう人々たちを選んだわけです。

こういう選び方は、いわゆる流派史とは違って、まして、別の視点——「奇想」の視点で選ばれたものです。発想や表現が奇抜で個性的である、一言で言うて「面白い」画家たちです。私は何でも「面白い」というのに価値の基準を置く人間でありまして、物の価値というものは面白い面白くないかで決まる。これはちょっと極端ですが、そ

うおもっているところがある。そうした自分に勝手な判定基準で「奇想の系譜」の画家たちを選びました。

どうしてまだ四十歳にもなっていない若造に、こういう選び方ができたかというところ、これには、出会いの因縁のようなものがあります。山根有三先生のご紹介がありました。私が美術史というのに入ったのにはわけがあります。実は私は医者になろうと思って駒場の理科Ⅱ類に入ったのですけれど、病気をしたりさぼって遊んでばかりいて、本郷の医学部なんてとても入れない。どこか入れてくれる他の学科がないか、あれこれ探しました。すると、美術史というとても簡単に進学できるところがあるというのを聞いて。そこに行きましたら、ちょうど山根先生が神戸大学から赴任してこられた。そして二年間授業を受けて、卒業です。当時は大変な就職難で、就職し損なったのが大学院に進学する。それが当時の有様だったので、大学院生は数が少ない。先生は西洋も含めて三人いらっしやったものから、学生の数と先生の数が同じくらいになる感じで、山根先生一人、私一人という大変贅沢な師弟関係だったんですね。今では信じられないでしょうけれども。それで先生は一生懸命になって。「君の修士論文、何をやるか」って。私が傾向の変わった学生だっていうことはよくご存じだったので「変わったものが好きそうだな、そうだな岩佐又兵衛が

いい」ということで岩佐又兵衛を選んでくださいました。

岩佐又兵衛が私の本の最初に出てくるんです。この人はちょっと他の画家には例のない、悲劇的でドラマチックな生涯を送った人です。お父さんが荒木村重という織田信長のもとにいる大変有力な大名でして、それが当時の戦国の習わしで信長に反逆して城に立て籠もってなかなか降参しない。信長はそこです、何を狂ったのかその城を落とす前に――荒木村重は逃げ出してしまつて他のお城に移つてしまつた――その荒木村重を追いつめればいいのに、見せしめといつてその城に残っていた一族郎党、女房子供つていうのを全部皆殺しにしてしまつたという非常に残酷なことをやつたんですね。当時でもそれは大変酷い行いだということ、評判になつたんですが、その中で殺された二二歳の、これは村重の正室の女房だったのか側室の女房だったのかわからないけれど、だし、と呼ばれている一人の美しい女性がいた。その女性が非常に潔い態度で処刑された、首を切られたということで、大変な評判となりまして、悲劇の大スターになつちやつたわけです。その子供だといふのが岩佐又兵衛です。どうして生き延びたかといふと、父親の荒木村重が逃げちゃつて城に残された人たちがもうだめだといふ落城寸前になつて、乳母が乳飲み子の又兵衛を抱えて城から逃げ出した。そうして生き永らえたと

いう、悲惨な生い立ちがあったわけですね。それが結局荒木家という武門を再興するということもなくて、画家として世渡りをするということになってしまっただけですね。そしてこれが世の中の人から、浮世又兵衛という渾名をされるようになって風俗画の名手となる。風俗画でいまだ前人未到の境地を開いたと後世の記録は書いていますけれど、いわゆる風俗画で浮世絵の発端となるような、そういうスタイルを作り出したという、それが浮世又兵衛なんですね。

だけどその人の絵というのはただそれだけじゃなくて、ちよつと不思議な、「奇想」という言葉で括られるような、不思議な形のゆがみがある。それから非常に特徴的なのが残酷な場面の表現ですね。芳年という浮世絵師が明治のはじめに同じような絵を描くんですが、その芳年の「血みどろ絵」のはしりを何百年も前にやっているような、当時まったく類のない絵を描きだしたんですね。この人を奇想の系譜の第一号に据えたのですが、それも山根先生に勧められたのが縁なんです。

時間の関係で、又兵衛のスライドは一つ二つしかお目にかけれません。これはMOA美術館の持っている「山中常盤」という絵巻なんです。常盤御前が奥州に落ち延びた牛若を慕ってそのあとを尋ねて、お供の女性と二人で旅をする。そして宿で無残に殺されてしまうというそういう

話です。美濃の国山中の宿、そこに着いたときの宿場の情景を描いた部分なんです。飄々としたのびやかな筆つきで、馬を描いたり人物を描いたりしてあります。(図1) これは

『堀江物語』といいまして、室町の終わりに、室町で起こったある仇討物語を描いた絵巻です。若い武士の夫がだまされて殺される。妻はそれを悲しんで自害する、それを見て

母親も自害する。そのはかりごとを自分で仕掛けた夫や侍従が皆駆けつける。これは「伴大納言絵巻」という平安時代の絵巻の中の「愁嘆場」——皆が嘆き悲しんでいる場面です。これにヒントがあるのですが、もっと生々しい血みどろな場面になっている。私が山根先生に連れられてこういう絵巻が膨大にあるMOA美術館には、岡田茂吉さん——MOA美術館をつくった世界救世教の教祖ですが、その人が又兵衛になぜか大変興味を持ってこういう絵巻物を



図1 堀江巻雙紙(部分)

買い集められた。今でも展示をしていますけれど、こういう場面はさすがにあまり出さないようにしています。

岩佐又兵衛につきましましては文春新書の一冊に『浮世絵をつくった男の謎』という拙著があります。カラーもたくさん入っています。宣伝で申し訳ありませんが、ご覧いただければと思います。(図2) これは、又兵衛のいわば表の絵で、彼の名「勝以」の印がおしてあります。貴妃が鏡の中の自分の姿に見惚れている美人画ですね。先の絵巻とはまるで対照的な、格調高い表向き画風、そういう又兵衛というの一方にあります。

それからその又兵衛よりもちよつと遅れて出てきた人に、狩野山雪がいます。桃山を代表する画家、狩野永徳の弟子が山楽、山楽の弟子が山雪という関係にあるので、れっきとした狩野派の画家ですが、異端児ともいえるべき変わった画風です。



図2 楊貴妃図

だが最近はこの方がもてるのですね。ついこの間、京都国立博物館で「狩野山楽・山雪展」というのをやりました、このときお師匠の山楽ではなく山雪の方に展示の焦点が当てられて、七対三くらいの割合で山雪が出たというくらい、お弟子さんが先生を食っちゃったような展覧会でした。狩野永徳が始めた巨大樹表現というのがあります。戦国武将が一門一族の繁栄を祝って、それを巨大な樹木に託して表現する。彼らのお城の中の御殿や、彼らの寄進したお寺の襖にこういうものを描かせる。そのために活躍したのが永徳であり山楽だったのですが、その桃山という時代も終わって徳川という、武士にとって閉ざされた社会が始まります。もう戦争もない、武士がサラリーマン化するという、ちよつと現代と似たような時代に入っていく。そのときに桃山の樹木がこういう不思議な表現を示すわけですね。誰が描いたかという山雪さんです。これは臥龍梅がぢゅうばいと言いまして、もともと中国では年老いた梅の幹が奇妙にうねる姿を龍になぞらえて寿ぎ描きます。だがそれをもとにしたこの屏風絵は、あまりにも異様な表現です。のた打ち回る龍というのか、怪物のような梅の樹、この人のグロテスクな画風は後の曾我蕭白の前触れになっています。

さて、そういう人たちがまず寛永年間十七世紀に活躍して、その後、一時なりをひそめるといふか、おとなしくな

るんですね。そのかわり尾形光琳という有名な人が活躍し  
まして、光琳の優美な画風が京都を中心とした画壇に流行  
する。しかし尾形光琳の時代というのは、意外に有名画家  
の少ない時代です。お配りした棒グラフを見てもこの辺は  
空き空きなのです。これはどういふことかというところ、やっ  
ぱりここはひとつの転換期だったのでしょうね。ここを経  
ると急に画家がむくむく出てくる。江戸文化がいよいよ  
円熟期を迎えたわけです。商人の階層の中に美術に対す  
るあこがれが生まれて、鑑賞する人も描く人も増えたとい  
うことだと思えます。この棒グラフの下の方には浮世絵師  
たちがいます。彼らは江戸の人ですね。その中に北斎とい  
う有名な人がいます。これは本当を言いますと『奇想の  
系譜』の本命に挙げるべきだと思いますが、なにせ九十歳  
まで生きた人で、この人をやっていますと、とても五分や  
十分では終わらないので、ちょっと外します。

それからもう一つこのグラフで、うっかりすると気づか  
ないで終わっちゃうのが、白隠という人。これは画家じゃ  
なくて有名な禅僧だった。静岡の原というところにおいて、  
弟子を教えたのですが、これが全国的に有名になって、臨  
濟禅という、この時代まったく元気をなくしていた禅の中  
心が、白隠によって息を吹き返したと言われます。(図3)  
その白隠という人は絵が得意で、こういう絵を描くんで



図3 達磨図

す。この絵は彼が七〇代くらいですから、ぼつぼつ若冲た  
ちが絵を描き始める頃にあたるでしょうか、とにかく彼ら  
より一代も二世代も前の人なんですね。しかしこれでご  
覧になってわかるように、そんな時代に描いた絵にしては  
おそろしく個性的なんです。これは面壁だるまと言っ  
て、達磨さんが洞窟の中で座禅をしているその横顔を描い  
たんですが、この目玉といい鼻といい、その衣の描き方と  
いい、うまいといつていいの下手といつていいのかそれ  
もわからないような強い個性がにじみ出ている。とにかく  
この人はうまく描くということを極端に嫌ったようです。  
禅の修行によって体得したものを絵の中に吹き込む、それ  
を目指したわけですね。白隠は京都にも来たことがありま  
す。そのとき池大雅が白隠に会って座禅の仕方を習いまし  
た。そのころの京都の画壇では、伊藤若冲だとか曾我蕭  
白、円山応挙、こういうすごい大物がずらっと横並びにな

っているのですが、その中の一人で南画、いわゆる日本文人画の大成者といわれるのが池大雅です。この人が白隠に会ったのはまだ二〇代の若い頃で、隻手の音声と言う座禅法を習いました。片手をあげて、掌の中に全宇宙の音が吸い込まれる、あるいは掌に当たって音を発する。そういうことをイメージしてみろという公案（課題）を出して、それを念じながらやると悟りが開けるそうです。私はこれやってもいっこうに悟りは開けないんですけれども。でもそういうことで悟りを開いちゃった人もいろいろいて、阿察あさつという地元の商家の娘さんが、若い頃お父さんと一緒にそれをやっていると「悟った！」ということになって、それ以来、白隠の弟子になってしまった。「座禅して 隻手の声を聞くよりは 両手叩いて 商いをせよ」、座禅するより、ばんばん、ばんばん、「はい、らっしやい、らっしやい」とやった方がいいよというような面白い和歌を作って白隠をへこませたといえます。面白いお婆さんになって、阿察ばばあといわれる人気者になってしまって、そのお墓は白隠のお墓と同じ松陰寺というお寺に今でもありますけれども、そういう女性に対しても禅を勧めた、いろんな意味で宗教思想史、それから美術史の上でも大きな役割を果たした人だと思っんです。特に簫白がこの人に影響を受けている。

どういふ影響を受けたかという点、自由に描け、自分の思ったことを描けという事を学んだと思うのです。そうすれば、自然にそこに、今までにないものがあらわれる。なにか見る人を別の世界に導いてくれるような、魅力を持った絵、それを作るヒントを白隠が与えたと思っんですね。

その白隠の次の世代に、京都画壇のルネッサンスともいふべき才能が現れる。その二人のスターが伊藤若冲であり曾我蕭白です。円山応挙は、本当を言いますと当時の人気ナンバーワンでした。『平安人物誌』という、当時の人気番付、紳士録みたいな住所録がありまして、そこでトップが円山応挙なんですね。それから二番目が伊藤若冲で、三番目が池大雅、四番目が与謝蕪村。蕪村はもう画家としても俳人としても、両方が超一流の域に達した素晴らしいアーティストですが、この人の名前を棒グラフから外してしまつたのは、私のミスで申し訳ありません。

蕪村はさておき、今をときめくのは伊藤若冲でありまして、この人の亡くなった年を西暦で表すと非常にわかりやすい。一八〇〇年、まさに十七世紀の終わりに亡くなった人なんですね。十七世紀というのは京都画壇が一種のルネッサンス的な輝きを放つた時期で、その中心であったのが伊藤若冲といつてもいいと思います。

(図4) いきなり出てきたのは、MIHO MUSEU

Mにある「象と鯨図屏風」です。今から数年前のことですけれども、MIHO MUSEUMという、ある宗教団体がつくった美術館の館長を私はしております、そこへ「こんなものがあるんですが見てもらえませんか」ということで写真が送られてきた。えっと驚いた。これは長年探していたものとそっくりなんですね。探しているものもはもう一つ別にあつて、今でも出てこない、ひよつとしたらな

くなつたかもしれないけれど、それが八十歳の絵で、これが八二歳と書いてある絵なのですが、若冲であることは間違いない。これはおそらく、八十で描いたものが大変評判になって、もう一つ描いてくれという人がいたので描いたのでしょうか。一雙の屏風の右端に象がいて、象の後ろになにか山み



図4 象と鯨図屏風 (右隻)

たいな変なものがあるのは、これは波なんです。どうして波かっていうと、この左のほうをみれば波つてわかるんです。そうするとこの象というのは海辺にいたことになり。海辺の象が鼻をあげて、なにか話をしたがつていような顔をしている。福岡伸一という人が書いた『生物と無生物のあいだ』という本がありますが、この本がいよいよ出版される直前にこの屏風が出てきてぎりぎり間に合った。福岡さんによると、この鯨と象は超音波で話し合っているところらしい。超音波による対話というのは、ワトソンという動物学者がその光景を実際に見たと証言しています。ちよつとオカルト的ですけど、そういう意見も加えてみますと、ますます面白くなるじゃないですか。この屏風の画題には、海の王者と陸の王者、黒と白の対比という面白さというならいもあるのですが、それだけじゃない、なにか不思議な感じがあります。

それからもう一つの面白い絵は、プライスコレクションの「虎」(図5a)です。これはなにか妙な虎を描いていて、そこに自分の描く虎は「真にあらざれば図さず」、真というのはい実際のものを見て描くという意味らしいのですが、しかし残念ながら日本に虎がないので毛益の虎を模写した、とあります。毛益というのには中国の宋の時代の動物画の名手、虎描きの名手で、その人の描いたといわれる



図5a 虎図 若冲



図5b 虎図 伝毛益

虎の絵が、京都・上賀茂の正伝寺にあって、それを模写したわけです。実際、模写した現物も残っています。それがどういうものかというのと、これなんです（図5b）。同じ絵じゃないの、というくらいそっくりなんです。

「動植綵絵」のことにありますが、この間ワシントンの

ナショナルギャラリーに行きまして、アメリカで初公開される「動植綵絵」三十幅の展示を見てまいりました。三十幅が「釈迦三尊」とあわせて展示されていて、大反響でした。四週間の間に二万人という、ナショナルギャラリーとしては空前の人が入った。ニューヨークタイムズの記者が「私はこれまでこれほど美しい展覧会を見たことがない I have never seen such a beautiful exhibition」と言ったというのがブームの一因だといわれます。

若冲はこれを、ほぼ十年間かかって作り上げたんですね。すべて花鳥画なんです、一点一点に非常に密度が高い、どの絵も密度が高いもので、特にこの「南天雄鳥図」は非常に迫力があるものです。我々の日常見えないような不思議な世界が若冲によって示されています。ただの南天ではない、ただの雄鶏ではない。（図6）これもそうです、棕櫚と鶏です。この棕櫚にしましてもただの棕櫚の葉ではなくて、その付け根のところにか丸い穴が開いてますね。その丸い穴っていうのは、本当に開いているのかどうか、私は実際の棕櫚を見たけれどこんな穴は開いていない。こういう丸い部分はあるんですけど穴は開いていない。それをこういう風に穴にして、見ると穴から何か覗いてるような感じがしてくるんですね、こういう表現を若冲はいたるところでしています。



部分をこうやって拡大すると、全く不思議な別世界みたいなのが見えてくる。どんな細かいところも省略しないで、隅から隅までまるで絨毯みたいにして埋め尽くすという、そういう画風なんですね。これはナニワイバラですが、小さなバラの花が、全部正面向きになってこちらを見ている。花っていうのはなにも全部が正面向きでこつちを見ているわけじゃなく、実際そういう花があったとしたらさぞかし気味の悪いことだと思のですが、若冲はそういう描き方をするんですね。それから「老松白鳳図」。松の木にとまる白い鳳凰です(図7)。鳳凰は中国画によく描かれるのですが、こんな不思議な鳳凰はちょっと見たことがない。尾羽の先に緑のハートと赤いハートが付いている、ハートが舞っているような。そしてこの鳳凰の顔を見



図6 棕櫚雄鶏図

ますと何とも言えない色っぽい鳳凰ですね。若冲という人は大変仏教を信心して、一生涯妻を娶らず、頭を丸め、肉を食さずという、そういう生活を送ったということですが。それでいながらもすごいエネルギーを保持させる。動物性たんぱくを食べなくてもこれだけのエネルギーが出るかというのは本当に大きな謎なんですけれども。(図8) これは「動植綵絵」制作の最後の頃に描いた「菊花流水図」です。当時、長崎にやってきた沈南蘋という中国人の画家を通じ、新しい花鳥画のスタイルが日本に紹介されました。これは、非常に鮮やかな、装飾的で、しかも写実的という、それまでの花鳥画とは違った魅力ある画風だということで大歓迎されて流行して。若冲もそれに一番影響された人なんです、そのスタイルを写しなが



図7 老松白鳳図



図8 菊花流水図

ら、さっきの虎の模写がそうですが、全て若冲になってしまふ。これは不思議なものです。その若冲が今度は晩年になりまして、ちよつと光琳の影響を受けたみたいですね。光琳風の優雅な流水文の、S字型にカーブする水の流れ、そういうものを描きながら、この菊の茎はもう枯れてしまつて、その上に花が咲くという事があるとしても、まるで水中の花みたいなイメージです。それからこの「雪芦雁図」、雪の積もった芦が描いてあつて、凍った池の表に向かって一羽の雁がまるで墜落するようにして下に落ちていく。これは実はこの上に猛禽の鷲とか鷹がいてこの雁を追つかけているからこういう格好になっているんです。この格好は昔からあるんですけれども、これだけ大きく描かれると一体何でこんなことをしているのか、もうじきぶつかるんじゃないかというような心配がでてくるわけですが、

ね。そういう心配はともかく、この雪の積もった枯れ芦の表現を見ると、これが一枚の絹に膠絵具で描かれた絵とは思えない、油絵具で描かれたような、非常に濃密な描写が見られるのですね。

その中央に「釈迦三尊像」が飾られました。これは当時東福寺にあった元か明の仏画を、若冲がそのまま模写したらしいんですが、どうも日本人にあまりなじみがない、変なものだと思つていたら、相国寺でこの三幅を室の中央に掛けて、両脇に十五幅ずつ「動植綵絵」を並べて展示したことが少し前にありまして、ぴつたりそれが当てはまつて、ああ、「動植綵絵」っていうのは一種の仏教絵画だな、ということがわかりました。

さてそれから、その「動植綵絵」を描いた後、若冲は名士になるわけですね。若冲は大体四〇代から五〇代のはじめにかけて「動植綵絵」を描き上げた、そして相国寺に奉納した。その素晴らしさに一挙に評判が高まつて、応挙に次ぐ存在になってしまったと思うんですね。たしかにナショナルギャラリーで短期間に二〇万の人を動員するだけの不思議な力をこの三十幅は持っているわけです。

若冲の家の商売は青物問屋で、その長男だったんです。四十歳のとき、家の商売をやめて、以後は絵に専心しました。そして「動植綵絵」で一躍有名になったのです。

ますます絵に専心しようと思ったんですが、町の方は名声のある若冲を手放すまいと、町年寄というのが難癖をつけてくるんです。若冲の属している錦小路の町に文句をつけて、「お前のところは冥加金（一種の年貢米みたいなもの、税金）を払っていない。認可を貰っているのか、いないのか」となどと文句を言ってくる。認可してもらっているが、書類は焼けてしまっていない、と言い逃れをします、ますます難題を付けてくる。その裏には五条の方にもう一つの青物問屋の組合があつて、それがどうも町奉行と結託して四条の方を消そうとしたらしい。そういう策謀があつた。これではならじとばかりに若冲がそこで大奮闘をします。

今でも錦小路へ行きますと狭い路地にいろんなものが出てますね。昔はあれが大体青物、野菜だったんですね。毎朝早くその店先が青物で埋まって近所の百姓さんがそこで青物を売る、その店を貸すというのが若冲の店の間屋としての仕事だったのです。これが閉鎖されたら、百姓が困るじゃないかと、百姓に訴えかけて、そして色んな運動をして、江戸の方にも働きかけたりして、とうとう三年がかりで京都の町奉行の企みを撤回させてしまったという、そういう意外な記録がほんの最近出てきた。江戸経済史をやっている宇佐美先生という滋賀大学の教授が、青物錦、青

物問屋の記録を調べている内に偶然発見しました。つまり、若冲という人は、やろうと思えばそういう実務的な俗世間との交渉なんかもできる人だったのです。だから、これまで考えられていたような若冲のイメージ、絵画オタクというか、絵しか描けない人というのとちよつと違うという事が分かったわけなんです。俗世間との商売も四七歳までやってた。だけど本当にやり続けたのは絵の仕事で、四十歳から八五歳になるまでやり続けた人なんです。

（図9） こういう水墨画っていうのも描いております。これは「野菜涅槃図」と言います、お釈迦様がいよいよ亡くられる時、御弟子さんが周りでワァワァワァ泣き喚いている、そういう有り様なんです、そこには人間は一人もいない。みんな野菜で、それを絵にしている。野菜が



図9 野菜涅槃図

そのお釈迦様ごつこのような事をしていているという面白い絵です。ですが、ただ面白いだけじゃなくて、梅原猛さんらが言っておられることなんですけども、「草木国土悉皆成仏」草も木も土も、この世にあるものは成仏出来るんだという思想がそこにあります。これは「天台本覚思想」といって、日本の仏教で特に発達した考えです。西洋でいうアニミズムの思想に近いもので、全ての物に命が宿っているというような思想、それとつながっているというわけなんです。野菜にも命があり、心もあるという事を絵で表したかったんだという意見があります。そう言われると確かにそういう気もしてくる。絵の手前の方ですが、実際の仏教・仏画では、ここに動物、象だとか虎、鹿だとか猿とかがみんな嘆き悲しんでいる。それが果物になっついていて、果物たちが本当に嘆き悲しんでいるように見えるから面白い。

京都駅から京阪線に乗って、伏見で降りてちよつと歩きますと石峰寺というお寺があります。その裏山が竹やぶになっついてまして、元は竹やぶじゃなかったのにいつの間にか竹が生えてしまったらしいんですけども、そこに石を削って不思議な顔をした石仏を並べる。羅漢さんでしょうけども、羅漢さんだとか托鉢をするお坊さんだとかお釈迦様の涅槃の光景だとか、お経の中に出てくる色々な出来事が

石の像で彫られている。全体を五百羅漢といっています。その一部が残っているんですね。最近ちよつと有名になっついてますが、やはり一見に値する、これが若冲の六〇代ぐらいだと思っんですね。

そして、これ（「樹花鳥獸図屏風」）が若冲のモザイク画とか、柘目描きとか言われるものです。若冲がこの変わった手法の絵を考え付いたのは、おそらく六〇代の後半から最晩年に変えてのころです。絵とはいってもただの絵ではなく、一種の超細密なデザイン画ですね。描かれているのは、屏風の片方が動物尽くし、片方が鳥尽くしです。

鳥は、鳳凰も含めて六十何種類。動物は三十何種類が描かれています。後の真つ青な色の広がり、空ではなく水面で、馬が泳いでます。雲のように見えるのは雲でなく鳥で可愛いアザラシの姿が見えます。動物と鳥の楽園と言われていますが、江戸時代に描かれた絵とは到底思えないような、洒落つ気のあるエキゾチックな光景ですね。チンパンジーとかヒクイドリとかハリネズミとか、長崎にまれに来る珍しい生き物も描かれています。牡丹が咲き乱れ、樹木はたわわな実をつけています。縁の方にある模様は、インドかペルシャか、南の方から運ばれてきた布地の縁取り模様のようなですね。空想されたパラダイスの世界。そこでは動物同士が殺し合いなどせず、みんな仲睦まじくして



図10 樹花鳥獣図屏風(部分)

います。虎の前には兎が平気でいます。これも「草木国土悉皆成仏」の世界でしょうか。

(図10)部分を見ますとこういう風になっています。一センチ四方ぐらいの網目で描かれていて、網目の数が八万六千個あるんだそうです。その網目の中にまた別の色が塗られていたり、細かな模様を描きこまれていたり、恐ろしく手間が込んでいる。プライスさんはこれを日本で見つけてアメリカに持って行っちゃったんで、残念ですけども。プライスさんはこれを絶対若冲が一人でやったんだと言う、しかし一人じゃなく何人もが手伝ってんじゃないかって私、言いました。すると、いやそんなことはない。こんな生き生きとした部分が助手の手によって描けるか、と答

えました。そう言われればそうかもしれない。これはペリカンじゃなくて何て言う鳥でしょうかね。くちばしが胴体ぐらいあるような面白い、それから下にある模様はですね雷鳥の、夏の雷鳥の羽を描いたらいいんですが、こういう手の込んだ仕事を八万六千の網目についてやるっていうのは一人では不可能だ、でも若冲だったらひよっとしたら、と私は思うんですけども、一方でこれが絶対若冲じゃないと言う人もいたりして。まあそんなことはどうでもいいじゃない、と思わせる楽しい作品です。それからこれも晩年のもので「百犬図」。犬っていうのは子沢山で子を授かるという意味で非常に縁起のいい、百っていう字も縁起のいいんで百匹のワンちゃんを描いた絵なんですけど、しかしこれも部分を見るとなかなかたの可愛らしいワンちゃんじゃなくて、ぶちの模様がですね、なんか気味悪い。

(図11)これは若冲が七五歳で描いた「菜虫図譜」のなかのカエルなんですけ

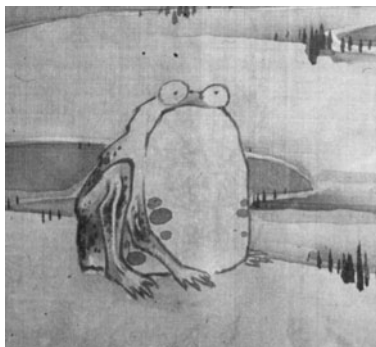


図11 菜虫図譜(部分)

ども、面白い。この人はユーモリストですね。ああいうもの凄いいしつこいような花鳥を描くと思えば、こういうふざけた漫画のような絵を描くようなユーモアを持った人でした。

さて、蕭白ですが、もう若冲だけで随分時間を取ってしまったんで、蕭白はごく簡単にお見せしましょう。若冲は錦小路を中心に活躍した人ですが、蕭白って人はその住所はよくわかってない。上京区に住んでいたってことぐらいしかわからないんです。興聖寺というお寺にお墓があって、兄弟・父親母親のお墓もあります。その過去帳によると、若冲と同じ京都の商人の出身だと思えるんですが、父親母親が早く亡くなって、兄弟も亡くなって孤独になり、子供も亡くして、絵を描いて生計を立てたということらしいんですね。しかしこの人は早い頃から独特の才能を持っていて、こういう不思議な絵を描くんですね。

(図12)「久米仙人図屏風」久米仙人は奈良の方の仙人で、雲の上から下を見下ろすと若い女性が洗濯している、その脛の白さに見とれて、神通力を無くし、墜落してしまっただ。墜落してからその若い女性と結婚して一緒に暮らしていた。そういう場面で、老人が籠をしきりに編んでいるんですね。この籠を編んでいるというのはどういう事かと言うと、龐居士ほうこしという中国の古い故事からです。龐居士と



図12 久米仙人図屏風 (部分)

いうのは、中国の偉い武官だったのですが、宮仕えが嫌になり、山に入って籠を編んで暮らした。娘がそれを町で売って生計を立てた、そういう故事とダブっているわけです。老人が籠を編みながら、悩ましい目つきで娘の方を見ている。この女性が脛を出して老人を刺激している所を描くんですね。「寒山拾得」、興聖寺にある丈が二メートルぐらいの大きな双幅でありまして、寒山拾得って言うのは禅宗の伝説にある二人の変わった人物で、一人端を読み、一人は箒で寺の庭掃除をしていた。乞食の風体を装った聖なる存在として崇められていたんだけど、これは奇怪なお化けみたいに描かれている、妖怪仕立ての寒山拾得と言ったところがある絵ですね。

蕭白は白隠の影響を受けたと先程申し上げましたけれど、これなどその見本です。白隠の達磨を模してこういう癩癪持ちの親方みたいな顔をした達磨を描く。

さて、これが今回のポストン美術館展で目玉になった「雲龍図」、丈が一〇メートルぐらいあるような長大な襖絵が、上野の国立博物館に展示されて、実に壮観でした。

これはお寺の本堂の西、北、東側の襖に描いてあったと思われる作品で、それを左端から右側へと見ていくんですが、この高さが襖の高さだと思ってください。これが龍の爪、そしてこれが龍の顔です。この顔は非常に遠見が効いて迫力があるついで、今度の展覧会のポストン展のポストンに随分利用されました。龍は神聖なる獣・靈獣なんです、それがちよつと、漫画チックに表現されながらしかし、すごい迫力を感じさせる。尻尾の方も普通じゃないんですね。これは胴体でこれが尻尾です。スライドは本当にイントロダクションで、実際にご覧になっていただきたかったです。ご覧になった方もいらつしやると思うんですが、これからもう日本に来ることは十年後ぐらいしかないだろうと思うと残念です。

これは三五歳に描いたという、私が見た中でも、狂騒的というか、やつぱり「狂」という字がどうしても入ってしまうような絵なんです。仙人というのは本来不老不死で

おめでたい人なんです、なんかこれ見るとあんまりおめでたいという感じにはならないんで、どういうつもりで描いたのか、誰が描かせたのかっていう事を考えると本当に面白い。この時代の京都が面白い精神状況にあったことがわかります。(図13) こういう顔を描くんです、顔は異常ですが、この髪の毛の細かいこと。一本一本非常に落ちていて描いてますね。手がこういうふうには、グリユーネワルドの描くような手をしておりますね。これは「蝦蟇仙人」っていう、蝦蟇を使った妖術を使う仙人を描いているんですが、これもまた何とも言えない水死体みたいな腹をしている。

こういう長々しい落款っていうのも、ちよつと他に類のないものです。「従四位下曾我兵庫頭暉祐朝臣 十世孫蛇足軒蕭白左近次郎 曾我暉祐雄行年三十五歳筆」。「行年」ってい



図13 群仙図屏風(部分)

うのは還暦を過ぎて六十歳過ぎてから使う年齢なんで、行年三五歳ってちょっと早すぎやしないか。それから上の方が花押かおし。署名の代わりに書くもので、一つひとつ全部同じじゃなきゃいけない。ところが蕭白は全部この花押の形を変えらるんです。しかもお化けみたいな不審な形に描きますね。

それからこれも三重県津の朝田寺ってところにある、酔っ払って描いたようなすごい迫力の壁貼付なんです。今は掛軸になってますけど。重要文化財になったのは結構なこと、ここにもさっきの竜と同じようなユーモアがあります。それからポストン美術館にある「商山四皓しょうこう図屏風」、これまで何度も日本に来た傑作です、人物の描き方など、白隠の影響が一番よく表れている作品だと思えます。樹木の描き方も永徳みたいですよ。

晩年にはこういう気味の悪い緻密な山水画を描いておられます。そしてこれがもう最後のスライドですけども、「石橋いしはし図」といって、能の謡曲の演目に石橋ってのがあって、ある僧が中国の清涼山のお寺を訪ねたところ、石の橋があって、普賢菩薩の化身である獅子が牡丹の花とともに踊り舞ったというのが謡曲の石橋ですが、これとは別に、獅子の子落としといまして、獅子が子どもを谷底に落として、谷底からまた這い上がってきた子どもだけを育てるといふ伝説があります。その二つがなんか不思議な形

で入り混じっているんですね。蕭白は五一歳と早く亡くなるんですが、その前年の作品です。こういう風に、獅子が谷底へひゅううううと落ちていくところが本当に面白く描かれている。この人の動物描きの才能も相当なものでした。

これは蕭白の絵でしょうか、誰の絵でしょうか。これ実は若冲の絵なんです。若冲と蕭白が付き合ったかどうかはわかりませんが、蕭白の変った画風に大いに興味をそざられ、蕭白をもじって描いた、「ちよつと蕭白風の達磨を描いてみたけど、どんなもんだい」という若冲のユーモアが出ているんじゃないかと思いますが。

そして北斎はもう時間がありません。国芳でしめくりましょう、この人も最近人気ありますね。よくあちこちで展覧会をしています。北斎を私淑したという人ですが、北斎を更にギャグ化したっていうのか、北斎の絵を更に楽しく奇抜なエンタテインメントの世界に発展させたのが国芳です。国芳の絵にはこういう風にお化けがいっぱい登場してきますね、今、お化け大好き、妖怪大好きっていう若い人が増えてきましたけど、そういう人のためにはこの「頼光 土蜘蛛退治」という三枚続きの錦絵がお勧めです。それから宮本武蔵が九州で鯨を退治してるところ。鯨の上で小さな武刀でやあーっとう鯨の背中を刺しているようだ



けど、こんなことで鯨が退治できるでしょうかね。全く面白くない。れっきとした大人がこういう他愛ない武勇伝を楽しんでいた。しかしそれにしては随分力強いですね。かと思ふところという絵もある。雨足をあめんぼうの手足で表しているんですね、水の中の金魚達が俄雨に遇って、うろたえているという大変皮肉な江戸の町人独特のギャグを表現している。

もう時間になりました。このあたりで失礼させていただきます。